

---

# 纏足（てんそく）

野鶴善明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

纏足<sup>てんそく</sup>

### 【Nコード】

N0670L

### 【作者名】

野鶴善明

### 【あらすじ】

数年前、中国内陸部の街で纏足の老婆を見かけました。まさか、纏足した女性に出会えるとは思いませんでしたので、びっくりしてしまいました。

数年前、纏足てんそくの老婆を見かけたことがある。

纏足についてはご存知の方も多いだろうが、とりあえず、ざっと説明しておこう。

纏足とは二〇世紀の前半までであった漢民族の風習で、幼女の足を布で縛りつけて大きく発育しないようにするというものだ。縛られた足は完全にその成長がとまることはないにせよ、大人になつたときには非常に小さな足となる。十センチくらいが黄金サイズと呼ばれ、足が小さければ小さいほど魅力的な女性とされていた。

纏足の女性を見かけたのは、中国・雲南省昆明の郊外のある公園でだった。五月の天気の良い日に、湖のほとりの遊歩道を散歩していると、とうに七十歳は過ぎているだろうと思われるおばあちゃんの二人連れが前からゆっくりと歩いてきた。腰を揺らしながら、ひよこひよここと。

老婆は二人とも、身長百五十センチくらいの背丈で、まるくぼちやりと太っている。昆明は標高約二千メートルの高地にある都市なので、長年にわたって強い紫外線を浴び続けた顔は赤銅色に焼け、彼女たちの人生の苦難をしのばせる深い皺が幾重にも刻まれていた。「ほらほら、小脚シャオジャオよ」

いつしよに散歩していた地元の友人が教えてくれた。小脚とは、すなわち纏足のことだ。漢語の話し言葉では、纏足チャンズーよりも小脚タージャオを使うほうが一般的なようだ。ちなみに、普通の足は大脚という。

「へえ」

驚いた私は彼女たちの足を見つめた。確かに小さい。子供のような青い布靴を履いている。まさか、纏足の女性に会えるとは思ってもしなかった。

二人の老婆はおだやかに話していた。方言なので会話の内容は聞

き取れなかったが、心地良い陽射しと余生を楽しんでいるようだ。すれ違った老婆を振り返った。

やはり腰を揺らしながら、ひよこひよこ歩いている。歩みを進めるたびに、お尻が右へ左へ、ゆりかごのようにゆったり揺れる。

「あんなふうに腰を振って歩くのがセクシーなのよ。昔の男は、それがすごく好きだったんだって」

相手は老婆なので、さすがにセクシーさは感じなかったが、アヒルのようでかわいらしいと感じた。チャイナドレスを着た妙齡の女性なら、また話は別だったかもしれないが。

「纏足つてすごく痛いよ」

友人が纏足について解説してくれた。

足を縛る際には、たんに縛りつけるだけではなく、足の指もむりやり折り畳んでしまう。足の指をそのままにしておいたのでは、小脚にならない。激痛が走るので、泣かない女の子はいない。纏足を施された女の子は、みんな布をほどこれと親に哀願する。

後日、纏足の素足を撮った写真を見たのだが、親指をのぞく四本の足指が足の裏にめりこんでいた。こんな状態で、成長しようとする足を縛りつけるのだから、痛みはなおさらだ。泣き叫ぶのもむりない。

このようにして纏足をしなければ、昔の漢民族の女性は結婚できなかった。大脚の女性は貰い手を見つけないかなり苦労したそう。だが、この纏足には、セックス・アピール以外にもうひとつ意味があるのだそう。

纏足では、当然、農作業などの重労働はできない。纏足の状態では普通に歩くだけでも腰が揺れるくらいだから、重い物を担ごうとすればひっくり返ってしまう。労働力としてはカウントできない。

労働力にならない娘を養っている。つまり、それだけ我が家は経済力がありますよ、ということを示すためでもあるのだ。

世間体のために畸形きけいにさせられたのでは、たまったものではないだろうが、自分の娘に纏足を施した親は、なにも我が子を虐待しよ

うとしたのではない。むしろ、その逆だ。

纏足することが常識の世の中では、纏足しなければまっとうな女とはみなされない。女性としての魅力や価値のない者とみなされてしまう。簡単に言えば、女ではないということだ。

そうなる困るのは自分たちだ。親は誰でも、我が子にいい人生を歩んでほしいものだし、世間の常識から外れた娘を育てれば、親の沽券にもかかわる。親たちはそうすることが親としての当然の義務だと信じて、疑いもせずに我が子の将来のために纏足を施していたのだ。もし纏足しないまま年頃になれば、その娘は嫁ぎ先がなかなか決まらず、どうして纏足してくれなかったのかときつと自分の親を恨んだことだろう。

纏足しなければ、女は女になれなかった。昔の漢民族の女性は、生まれながらに女として生まれてくるのではない。纏足することで、ようやく女になるのだ。漢民族は纏足の習俗が永遠に続くものと思いいこみ、いつか女性が纏足しなくなる日がくるとは考えもしなかった。女は小さな足で腰を揺らしながら歩くものだと言われ、信じこんで。

女真族（満族）の政権である清朝は漢民族の纏足の風習を嫌い、纏足禁止令をたびたび発したが、漢民族がこれに従うことはなかった。

纏足の風習がすたれ始めたのは一九一一年の辛亥革命以降で、その後、一九四九年に大陸中国で政権を奪取した中国共産党によって全面的に禁止された。漢民族の女性はようやく行動の自由を得ることができた。

漢民族がなかなか纏足をやめようとしなかったのは、ほかでもない、彼らの思考回路が世間の価値観に「纏足」されていたからだ。みんながそうしているから、纏足しなければならぬという横並び意識が原因だ。個人の意見が尊重される世の中であれば、ほぼ全員が纏足されることもなかっただろう。いかに世間の価値観の「縛り」がきついのがよくわかる。

とはいえ、纏足の風習ばかりを批難することはできない。自分自身で気づかないうちにある価値観に縛られるというのはよくあることだ。いや、そんなことばかりだと言っても過言ではないかもしれない。ふと我と我が身を振り返ってみれば、なにかに「纏足」されていないだろうか？ なにかの「空気」に縛られていないだろうか？ ほんとうに自分の頭で物事を考え、自分の足で歩いているだろうか？

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0670/>

---

纏足（てんそく）

2011年7月18日03時33分発行